

【議事録】 令和5年度 下関市立美術館協議会

日 時 令和6年（2024年）3月22日（金）午後2時から午後4時20分

会 場 下関市立美術館 講堂

出席者 協議会委員（出席10人）

小戸 毅、清永 修全、青木 博美、藤井 悦子、重井 民雄、戸崎 由弥、  
和田 健資、五十嵐 美紀子、山中 奈津子、伊東 丈年

下関市教育委員会

教育長 磯部 芳規

下関市立美術館

館 長 岡本 正康 副館長 柘谷 範一

主 任 渡邊 祐子 会計年度任用職員（学芸員）高村 典子

傍聴者 なし

次 第	発言者	内 容
1 開会	事務局 (副館長)	ただいまから、令和5年度の下関市立美術館協議会を開催いたします。まずはじめに本日の会議の配付資料ですが、次第、委員名簿、会議資料をお手元にお配りしておりますので、ご確認のほどお願いします。本協議会の委員は、昨年の令和5年9月から令和7年8月までの2年間を任期として、10名の方を委嘱しているところです。本日もご出席の委員は10名で、定数の過半数を上回りますので、下関市立美術館の設置等に関する条例施行規則第8条の規定により会議が成立していることをご報告いたします。また、本日の協議会は公開で行われ、議事録は後日下関市ウェブサイトにて公開する予定です。なお、本日も傍聴の方はいらっしゃいません。
2 委員及び出席者紹介	事務局 (副館長)	それでは、早速ですが次第に沿って進行させていただきます。本日もご出席の委員のご紹介をいたします。氏名、役職名等は、お手元に配付の委員名簿のとおりですので、事務局からの紹介はこれに代えさせていただきます。今回は改選後初の会議となりますので、お一人ずつ、自己紹介をお願いいたします。こちらから時計回りでお一人ずつ自己紹介をお願いします。 (自己紹介は省略)

<p>3 教育長挨拶</p>	<p>事務局 (副館長)</p> <p>磯部教育長</p>	<p>続きまして、下関市教育委員会 教育長 磯部芳規よりご挨拶を申し上げます</p> <p>皆様こんにちは。まず本日は委員の皆様方には、大変お忙しい中ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。また、平素からこの下関市立美術館の運営に関しまして格別のご理解またご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。</p> <p>この美術館は、昨年11月に開館40周年を迎えておりまして、開館記念日である11月19日からは、記念特別展として「アニメーション美術の創造者 新・山本二三展」を開催しています。宮崎駿監督ら日本のアニメーションがブームになっていますが、この代表する名監督たちとともに美術監督として数多くの作品を手がけた山本二三展でございまして、大変好評を得たと考えております。また、2月から3月にかけては、下関ゆかりの芸術家の狩野芳崖の作品を中心とした、「狩野芳崖、継がれる想い 悲母観音からはじまる物語」と題した記念特別展覧会を開催しました。こちらの方では、《悲母観音》を十五年ぶりに本美術館に迎えると共に、晩年のもうひとつの《仁王捉鬼図》も展示し、大変多くの方に喜んでいただいたと思っています。私も両展示に来ましたが、小さなお子様からたくさんの方が来られ、とても嬉しく思い一緒に観ておりました。また、今年度はコロナも収束の方向に向かい、色々なところで人が賑わい、こちらにも足を運んでいただける環境が整ってきたものと思っています。</p> <p>本協議会は、様々なお立場の委員の皆様から、美術館運営に関するご意見、ご助言をいただいた上で、これからの美術館の運営の改善に繋げ、市民の皆様の芸術文化の創造と振興の場として、開かれた美術館づくりを一層推進していこうとする趣旨で開催するものです。どうぞ、忌憚のないご意見をいただけたらと思います。教育長として、たくさんの方の市民の方に来てほしいという、そのような願いでやっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。</p>
<p>4 正副会長の選任について</p>	<p>事務局 (副館長)</p>	<p>続きまして、次第4「正副会長の選任について」です。選任は、下関市立美術館の設置等に関する条例施行規則に基づき、委員の互選により行います。つきましては、どなたかご推薦の方はいらっしゃいますか。</p>

	伊東委員	<p>これまでも、いろいろなお話をまとめていただいた清永委員に会長をしていただけたらと思います。</p>
	事務局 (館長)	<p>ありがとうございます。今ご推薦をいただいたところで、会長は東亜大学の清永先生に今回も引き続きお願いさせて頂くとして、副会長の方は前メンバーの時と同じで、重井委員にお願いしたいところです。ご異議ありませんでしたら、承認いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。</p> <p>(拍手)</p>
	事務局 (館長)	<p>それでは会長を清永委員、副会長を重井委員にお願いしたいと思います。では、恐れ入りますが席を移動していただきまして、進行したいと思います。</p> <p>(座席の移動)</p>
	事務局 (副館長)	<p>それでは会長、副会長より一言ご挨拶をお願いいたします。</p>
	清永会長	<p>ただいまご指名を賜りました清永でございます。ありがとうございます。謹んでお受けしたいと思います。微力ながら円滑な運営に貢献していければと思います。皆様方のご協力を謹んでお願いするものでございます。よろしくをお願いいたします。</p>
	重井副会長	<p>重井と申します。あまり難しいことはよくわかりませんが、足を引っ張らないように頑張ります。よろしく申し上げます。</p>
	事務局 (副館長)	<p>どうもありがとうございました。では、ここからの進行は、清永会長にお願いしたいと思います。清永会長、よろしく申し上げます。</p>
5 議事 議題 1 令和 5 年度 事業報告に ついて	清永会長	<p>それでは議題 1 ということになりますが、お手元の資料に従いまして、令和 5 年度の事業報告について、事務局の方からご説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。</p>
	事務局 (館長)	<p>はい。それでは美術館長を務めております岡本からご説明をしたいと思います。これからの説明にあたって、別紙をご参照いただければと思います。今、お手元の資料が、別紙 1 から別</p>

		紙7までございます。こちらを並べてご覧いただければと思います。まず別紙について、1番から7番までございます。その都度ご確認くださいので、お手元に揃っていないようなことがありましたら、お届けいたします。それでは、協議会資料に基づいて、表紙をめくっていただいて1ページ目です。議題1、令和5年度の事業報告についてです。
1 施設概要	事務局 (館長)	まず施設の概要、今回新たにご就任いただいた委員の方もいますので、美術館の概要紹介というところです。令和6年3月1日現在の施設の状況について、別紙1をご覧ください。この中に美術館の建物の概要、運営の概要が書いています。これはお手元でじっくりご覧いただければと思います。施設全般に関して、令和5年度中に変化があったことについて、かいつまんで申し上げますと、敷地面積のところですか。別紙1の1枚目、最初のところで、敷地面積という項目がございます。こちらに敷地面積15432.13平方メートルと書いています。この2月9日に美術館の一部敷地用地354平方メートルあまりを売却いたしました。これは美術館の隣地を市内の企業の方が取得され、この境界の管理の関係で、美術館の土地の一部をお譲りするというかたちで売却したものです。兼ねてから、隣接地のあたりは植栽など非常に管理が困難だという状況がありました。美術館側だけではなく、隣地をご所有の方もおっしゃっているのですが、植栽に加えて地形の問題等で難しく、何とか解消したいということであり、美術館としても兼ねてから管理の手が行き届かないところもあり、売却するというところで協議をし、処理したところですか。これにより一部敷地面積が狭まっているというのが令和5年の変化のポイントです。その他、3枚目に職員の現況というページがございます。こちらは、令和5年度中の人事異動の関係です。職員数は10名ということで変わりがありませんが、年度途中で学芸員が交代するというようなことがありまして、少しメンバーが変わっております。会計年度任用職員の学芸員が退職をしたことに伴いまして、新しいメンバーを迎えました。そのため、顔ぶれが変わっています。このあたりはご覧いただきまして、何かございましたら、ご質問いただけたらと思います。以上、1の施設概要です。
2 予算	事務局 (館長)	次に2の予算について、別紙2をご準備ください。別紙2、令和5年度下関市美術館予算一覧について、こちらにまとめています。令和5年度歳出予算の計が、1億4,328万9千円で、

	<p>これに対する歳入、財源の関係ですけれども、計が5,133万3千円ということです。これを合わせて次の項目になりますが、令和4年度の予算及び決算と合わせてご覧いただきたいと思っております。別紙3、令和4年度下関市立美術館予算及び決算の表ですが、令和4年度の歳出予算の計が1億6,724万7千円。それに対する歳入は、7,279万7千円というような状況です。令和5年度は4年度に比べますと、歳出予算減となっております。この変化の大きなところですが、ひとつには美術館の改修業務の予算の方向性が変わったということです。令和4年度は大きな改修工事が3件ほどありましたけれども、令和5年度は、建具改修、それから空調の改修計画を立てる業務をやったということでありまして、この辺りの金額の差がひとつ大きな変化になります。もうひとつは、美術品資料収集業務のところですが、令和4年度の収集業務は122万4千円であったところが、令和5年度については742万8千円と、何百万円か変わっております。今年度増になった内容としましては、ふるさとものせき応援基金の活用ということで、650万円の予算をいただきました。駐車場に入られたときにご覧になられたかと思いますが、屋外彫刻で、足場を組んでいますけれども、そういった屋外設置の作品のメンテナンスに関わる予算をつけていただいたということで、こちらの対処が長らく念願していたものですが、できたということで、こちらは増えています。令和5年度については令和4年度よりも工事の関係などもありまして少し小さな予算ということで行っているところです。その他令和5年度については、開館40周年という記念の節目でしたので、展覧会の開催業務については令和4年度よりも少し大きな予算で行なったところです。令和4年度は自主企画展を2本、単独開催の自主企画を2本という体制でありましたが、今年度は先ほど教育長からご挨拶申し上げましたとおりで、山本二三さんの展覧会であるとか、狩野芳崖の展覧会ということで、少し予算が大きな展覧会を組んだということでもあります。さらにもうひとつ、赤間関硯の企画展というものも行ったというものです。そういったところが予算の概要です。そして、また決算のところをご覧いただきますと、改修業務として、施設改修として行ったもの、直流電源装置更新工事、それから監視カメラ設備の改修工事、展示室LED化委託業務ということを挙げています。これは令和4年度から、この美術館個別施設計画と申しますけれども、施設の長寿命化計画を立てたことに基づきまして、地方債の活用を行ってやっているものでして、個別計画に基づく改修がいよいよ本格的に始まるということ</p>
--	--

		<p>です。こういったあたりが予算の概要としてご覧いただきたいところですが、またその他、お気づきの点、ご質問などございましたら、後ほどいただければと思います。</p>
<p>3 業務別事業実施状況 (1) 管理運営業務</p>	<p>事務局 (館長)</p>	<p>議題1の3ですが、業務別事業実施状況に移らせていただきます。(1) 管理運営業務です。こちらについては、美術館の経常的な施設管理及び、まさに今やっております附属機関である美術館協議会の開催、それから施設の改修及び計画策定業務といったような内容が業務内容です。「ア」としてありますが、令和5年度の下関市立美術館協議会は本日3月22日に開催しているところです。「イ」の施設の改修ですが、こちらは業務名にありますとおり2件改修を行っております、(ア)の建具改修工事ですが、こちらは窓枠などを修繕したものです。窓枠金属の部分ですけれども、これが環境の問題、潮風であるとか、幹線道路に近い立地ということもあって、金属の腐食が進んでおまして、窓の開閉が難しくなっている場所がいくつも生じているということで、これは通常の事務だけでなく、美術品、その他資料管理にあたっては、警備の問題となり非常に危惧される内容であったということで、こちらへの対処ということで工事をいたしました。こちらの工事に関しましては、幸いにして休館にはならず済みましたので、展覧会などを開催しながら実施しました。令和5年の8月28日から12月14日までの工期で、所要経費962万5千円という内容のものです。そして、「イ」ですが、展示部門空調改修計画策定業務です。これは工事そのものではなく、これからする工事に対する調査、それから方針立案というものです。展示部門の空調設備が旧式化、老朽化しているという長年の課題があり、こちらにどう対処していくかということで、今年度こういった調査で計画策定ということになり、令和6年度はいよいよ実施設計を行い、できれば令和7年度に工事というスケジュールで考えているものがひとつです。こちら令和5年の12月15日から本日までの日程としてありますが、建築設計の専門企業による計画立案ということをしており、これは新年度に実施に向けてたたいていくということにしております。そして、施設の使用に関することですが、「ウ」施設使用のところですが、展示室、造形室、そして陶芸用の窯場、こちら供用をしております。一般市民の方が申請により使えるという制度にしておりますが、こちらを表にまとめているところです。展示室及び講堂等、これは展覧会の開催を主な目的としてご利用いただくものですが、こちら</p>

		<p>件数が19件、括弧内に出ております数字は前年度の令和4年度のものであります。そして19件で、使用日数は126日。昨年度が165日ということです。若干令和4年度よりは減っております。これは展覧会の開催日程などの関係もありまして、変動するものです。そしてこれは教育普及部門になりますが、造形室、市民の皆さんが絵画の製作や焼物の製作といったことをご利用いただくスペースです。こちらの利用が110件。令和4年度は97件ですが、使用日数が157日。令和4年度145日ということです。この造形室は、利用者数で見ますと1,664人。美術館の利用者の展覧会の観覧に来られた方以外にこういった方が美術館を利用されているということです。この造形室の利用に関しては、陶芸部門で利用される方、陶芸窯、焼き物を焼く電気窯があります。こちらの利用とセットで使われますが、電気窯の利用が年間で20件ほど、昨年度は22件でした。こういった陶芸活動に使う内容もありまして、美術展の鑑賞以外の芸術活動というものの一部を担っているものです。</p>
<p>(2) 展覧会開催業務</p>	<p>事務局 (館長)</p>	<p>では1ページめくっていただいて、(2) 展覧会開催業務です。令和5年度ですが、企画展示、特別展を3本、そして所蔵品展示を4本開催しております。このほかに美術館で行われた展覧会といたしましては、下関市芸術文化祭の美術展、そのほか先ほど市民の利用のところで申しましたが、施設使用による市民ギャラリーの展覧会、こちらが18本ほど開催されております。令和5年度は去る3月17日をもって展覧会の全日程を終了しております。現在その撤収を行なった後、展覧会の借用作品の返却にあたっているところです。この展覧会開催業務の来館者数ですが、美術館が主催した展覧会、先ほどの市民ギャラリーを除いて、美術館が主催した展覧会の観覧者数が27,848人。このうちの展覧会関連催事イベントの参加者は1,047人。そして市民ギャラリー等の美術館の主催でない展示についての観覧者数が17,680人となっており、令和5年度の来館者の合計は45,528人です。ちなみに、年度内の開館日数は245日間です。前年度の令和4年度の来館者数との比較ですが、前年度は合計27,587人、開館日は221日です。コロナ禍の対応ということが一段落した今年度は、倍増とまでは残念ながら、一定の拡大を見まして、4万人を超える来館者をお迎えしところです。コロナ禍以前、直前のあたりが5万人台でしたけれども、徐々に戻りつつあると思っています。そして展覧会別の来館者数です。こちらの別紙4、これはA3版</p>

の紙にしております資料をご覧ください。各展覧会別の来館者数を有料、無料という部分に分けてお示ししています。ちなみに特別展の企画展示の成果ということで申しますと、昨年9月から10月にかけて開催した「赤間関硯 堀尾信夫の挑戦」が1,627人、そして開館40周年記念特別展と銘打った2展がありますが、「アニメーション美術の創造者 新・山本二三展」が11,636人、「狩野芳崖、継がれる想い」が7,461人です。展覧会の個別の概略については、「ア 企画展示」、「イ 所蔵品展示」のところでまとめています。この開館日数、それから開催形態についてまとめているところですが、こちらをご覧ください。特別企画展示、それから所蔵品展示のほかに特集展示というものにも取り組んだところです。こちらは、主に市民ギャラリーの利用ということでは、1階の展示室4、講堂を貸出可能なスペースにしているところですが、この市民ギャラリーとして提供、供用している部分ですが、必ずしも年間を通して埋まらないところでもあります。そういったところの期間を調整して、まとめた期間を作り、その中で美術館の小企画の試みであるとか、所蔵品の一部をまとめた展示というようなことをしていくわけです。そういったものの特集展示といたしまして、流動的ではありますが中に入れて開催しています。その中で今期については、年度初めの4月から5月にかけて、「潮流・下関展」、これは地元下関の出身あるいは在住の現役の作家さんを対象にする企画ですが、こちらを組み込みました。今年度については、「潮流・下関 2023、Three Lives、勝原実紀枝、文月今日子、村岡真樹」という3人の作家のグループで開催しました。こちらは観覧無料という形で、ジャンルの異なる3人の作家さん、勝原実紀枝さんは油彩画を中心にしています。文月今日子さんは、漫画作家で少女漫画の大家でございます。そして村岡真樹さん、こちらも絵画の作家の方です。世代も少しずつ違う方々ですが、この3人が集っての展覧会というかたちを今回は行ったところです。そして特集展示のところで②としております開館40周年記念の「美術館40年の歩みから」というものですが、これは新・山本二三展の会期の前半に当たりますが、この時期に展示室4で、美術館のこれまで行なった自主企画の展覧会のまとめをして、どのような展覧会を行ったかということ、ポスター展示と簡単な解説をしたものをずらっと並べるという形で、今までのこの美術館での学芸活動の振り返りをしたものを行っております。その他、美術館は下関市役所で出張展示を行っております。下関市役所の本庁舎で、資料では新館と書いてありますが、現在、西棟と東棟

		<p>となっておりまして、議会などが入っている西棟の方の1階のエレベーターホールに展示専用の展示ケースを設置しております。これはもともと下関市のポートルース企業局に設置していただいたものです。このたび、備品の保管替えも行い、下関市立美術館での管理で美術館の所蔵品の展示を行なっております。令和5年度も7期に分けて、所蔵品、所蔵する資料の展示というのを行いまして、この美術館本体での展覧会の告知、或いは企画との連動というようなことを試みながら、市民の方に親しんでいただこうという試みを行っているところです。ぜひ、また市役所へ行かれた方は、どのような展示があるのかご確認いただければと思います。以上が美術館の主催の展覧会です。そして少々説明が重複しますが、「オ でその他の展覧会」ということで、下関市芸術文化祭・美術展について、それから市民ギャラリーについての概略を書いております。市長部局との連動、あるいは文化協会との連携のような形で行なっていく展覧会などにつきましても令和6年度も引き続き展開していきます。またぜひご観覧いただきましてご指導いただければと思っています。以上、展覧会に関わるところです。</p>
<p>(3) 美術作品 資料収集 保管業務</p>	<p>事務局 (館長)</p>	<p>では協議会資料をめぐっていただきまして5ページですが、美術作品資料収集保管業務です。作品資料の収集活動についてです。ここに今年度の収集活動についてまとめています。(ア)収集審査会ですが、今年度も開催しています。第63回の美術資料収集審査会ですが、2月19日に開催しました。審査員5名、山口大学名誉教授の菊屋先生をはじめ、5人の専門家の方をお招きしての審査会で、今回63回の収集審査では69件の美術資料の審査を行いました。収集の内訳は、文章で書いているところですが、寄贈が56件、寄託が13件という構成です。作品の分類ごとの内訳は、日本画が10件、洋画が10件、水彩・素描が4件、版画2件、彫塑2件、工芸38件、写真1件、資料2件です。収集美術資料の一覧は別紙のとおりです。今回は件数で言いますと、工芸の部門が38件と多数に上ります。こちらは赤間関硯に関する資料をたくさんご寄贈いただくということがありまして、このあたりが件数を大きくしているところです。別紙をご覧くださいまして、一覧表にしているものと、図版、小さくなっていて恐縮ですが図版入りで概要をお示ししているものがありますので、ご覧くださいませ。当館の収集につきましては、作品の購入予算というのはいまありませんので、寄贈いただく、あるいは寄託と申しまして、</p>

所有権を所蔵者の方が保持したままで美術館に公開や調査研究を託していただく、委ねていただくという形式で、お預かりする制度での作品収集です。今回69件の美術資料を審査しまして、収集可としていただきましたので、現在、寄贈・寄託の受け入れの手続きを、年度未完了に向けて進めているところです。この69件を合わせますと、今期、今年度末で、この美術館の所蔵作品の総数ですが、2,561件となります。2,561件、そんなに多くなく見えるかもしれませんが、一件資料が一括でひとつの資料群をまとめていたりするものもありますので、一点一点をどのようにカウントするかという問題が難しい資料もございますが、作品数資料などがあり、こういったものを収集して、管理し、展覧会などで公開に供しているところです。そしてこれはこの美術館で内部でのみ取り扱うものではございません。協議会資料を1枚めくっていただきまして6ページですが、所蔵品の貸付ということも行なっているところです。他の美術館、博物館で開催される展覧会への出品です。展覧会への出品依頼に応じまして、貸付を行なっております。令和5年度につきましては5件の貸付がございます。コロナ禍にさしかかりましてから、非常に展覧会活動が難しくなっているということで、美術館、博物館相互の作品資料の貸出というも非常に難しい状況もあった中です。少しずつ件数が増えてきている感触もあるところです。今年度につきましては一覽にまとめておりますところで、12点の作品が、この美術館を出て、外の会場で紹介されております。各博物館、美術館の工夫を凝らした展示を試みるということで、今まで出なかったようなものを、紹介されているところもあるようです。このようなものが、外部からの引き合いで、下関市立美術館所蔵ということで紹介され、下関市を代表して文化大使のような形で利用されております。では1枚めくっていただきまして、保存修復に関してです。先ほど予算決算のところでも申しましたが、令和5年度は「ふるさとしものせき応援寄附金」の活用事業ということで、屋外彫刻の整備を実施しております。これはまだ処置が完了してないものもありますが、8件の作品について処置をしております。作品そのものに対する処置もありますが、より幅広い整備ということで、設置されている台座の安全の確認、整備ということ、それから、案内表示の整備といったことも試みたものです。ブロンズの作品などは、かつては3年に1回から5年に1回という形で解体して、X線写真を撮って内部の構造を検査するといったこともしてはいたしましたが、久しくそのあたりをしていなかったものもあり、こういったものを今回、処置すること

		<p>ができました。いわゆる銅像の作品などは見ていただくと、色調なんか印象が変わったと思っただけのものがあるのではないかと思います。古い保護層、コーティングなどを研磨をしたりしながら、新しいたすまいにするというようなことをしておりますので、ぜひまたご来館の際にご覧いただければと思います。そして駐車場にあります金属彫刻、ステンレス製の作品であるとか、赤い塗装がしてあるもの、それも古い塗装をすべて剥がして、新たにするというような形で、剥落や錆びが生じて腐食の危険があるところの対処ということもしておりますので、何か様子が変わったと思われる方もいるかもしれませんが、そういったことをやっております。鑑賞の状態の向上もありますが、作品の安全ですね、屋外にあるものですから、例えば倒壊したり、部品が落下したりということがないように対処をするということで、作業をすることができましたので、少し安心しているところです。そのようなことが今年度できたところで、40周年にふさわしいことのひとつでもあろうと思います。以上が収集保管に関わるところです。</p>
(4) 調査研究業務	事務局 (館長)	<p>そして(4)で書いていますが、調査研究業務、これは資料では1行しか書いていませんが、引き続き、学芸員が調査研究の活動をしているところです。文献の収集などを主に挙げておりますが、なかなかこのあたりが非常に地味な部門でもあり、予算も非常に手薄なところです。また、学芸員がいろんな展覧会などの業務で、じっくりと勉強するということが、地元の作品の調査に行ってくるということがなかなか難しい中でこれからどうしていくかということが課題ですが、引き続き、今年度も行ない、来年度に向けて改善できるような形を考えたいと思っています。</p>
(5) 普及教育業務	事務局 (館長)	<p>そして(5)普及教育業務ですが、こちらにつきましては、別紙6がございます。別紙6も多岐にわたっているもので、少々ご覧いただくのに煩雑ですが、一覧にまとめておりますような事業を行っております。アからエまで、大きく4つの括りにしてはおりますが、表とちょっと照らし合わせづらいところもあると思うのですが、「ア ギャラリートーク・美術講座等の開催 実技講座、ワークショップ等の開催」ということで、これは主に学芸員が講師を務めるなどして、座学であったり、実技の手ほどきであったり、そんなことをするいわゆる教室というようなものですが、こういったものがひとつ。それから各学校や市</p>

		<p>民団体から要請を受けて行う「出前講座」、そして「ウ」ですが、学校の行事であるとか、実習、研修の受け入れ、そして「下関市立美術館友の会との共催の事業」、ギャラリーコンサートなどがそうですが、こういったことを普及教育業務の中に位置づけて行なっているところです。こういった講座開催に関わる場所とは別にもうひとつ広報ということも挙げております。広報・印刷物の作成に関する事ですが、広報誌、美術館誌『潮流』の発行、年間スケジュール表、お手元にスケジュールをお届けしております。こういった案内用の印刷物の作成ということを行なっております。そして広報については、1枚めくっていただいて8ページになりますが、美術館の公式ウェブサイトをはじめとする電子媒体で、広報告知という活動をしているところです。公式ウェブサイトの中に、SNSの関係で、X(旧Twitter)、それからFacebook、Instagramといったことをやっております。その他にも、美術館で行ったイベントなどの模様を収録した動画などを公開しているYouTubeチャンネルもございます。こういった中で、講座を開催している普及教育業務を紹介し、いろんな媒体にも展開しつつ、実施しているところです。このあたり、件数もかなりたくさん増えてきているところですが、学校、それからいろんな市民グループの要請も盛んになってきているところです。こういったところに、展覧会の合間を縫って、学芸員が出向いて、お話をしたりしているところです。こういったことをすることによって、新しく芸術に触れて、あるいは踏み込んでいこうという方のご案内、あるいは手助けができればと考えています。それでは、議題1の令和5年度の事業報告というのは以上のとおりです。</p>
<p>質疑</p>	<p>清永会長</p> <p>和田委員</p>	<p>はい。ただいまの説明がございました内容について、皆様、もしご質問やご意見等ございましたら、挙手の上、ご発言をよろしく願いいたします。</p> <p>はい。私の方から2点ございます。まず1点目です。資料の内容では予算があって、決算額があって、そして集客の人数があるのですが、収入の部分というのは見当たらなかったです。イベント事を行う際に、無料で行なっているものもあれば、有料のものもありますから、収入はどのようになっているのかという事をお聞かせ願えればと思います。今から質問するふたつなのですけども、ふたつとも美術館にお客様がどれだけ来るのか、もしくはどれだけ収入がないと予算を増加できないのか</p>

		<p>っていうところも鑑みての質問です。そして、ふたつ目です。先ほど美術館の公式ウェブサイトのSNS運営というところでざっと調べてみました。まず最初に、下関市でアプリで運営している「しもまちアプリ」だったり、「しもまちアプリプラス」の方には美術館の情報が出てきてなかったの、どこにあるのかが分からなかったのですが、Facebook、X(旧 Twitter)、YouTube、Instagramをやられているという風にお聞きして、ざっと調べてみたのですが、Facebookは「887 いいね」です。これは「このページいいよ」って言うってくれる人が887人いたということです。フォロワーが972です。通常こういう組織母体になったりするところの、ある程度の総数っていうのは、1000を超えないとあまり見られてないっていう風に言われる数です。YouTubeに関しては、登録者がYouTubeを見てくれるというのが43名です。登録件数は25本あります。これは動画の件数です。一番多いのが、野村佐紀子さんが来られたときの野村佐紀子さんが動画をアップしているっていうのがあるのですが、一番回数が多いのでアールヌーヴォー展のときの294回で、「いいね」は2です。Instagramのほうは投稿件数は79件で、フォロワーの人、フォロワーというのは見てくれている人、それをフォローしてくれているのが234名です。美術館からその人達に「フォローしていますよ」っていうふうに、ペタッと足音とか手形をつけて、スイッチを押すと、その人たち登録者に美術館の情報が一気に流れるのですが、そのフォロー中の人はゼロです。何が言いたいかと言いますと、情報発信力というのはあるだけでは駄目です。そこから拡散していかないと、というのがあります。私も何度もずっと美術館にはWi-fi 必要ですよと言ってるのは、この内容のひとつも含まれている部分です。今後、ある程度の収入があって、ある程度の集客がないと、やはり美術品の保管、もしくは新しく所蔵するものも、寄贈に頼るしかない、寄付に頼るしかないにならないようにしなければいけないのかなという風に、この中身を見ながら、今悪くなるわけでも、今よくなるわけでもないけれども、ただやるのであれば、そういうちょっと掘り下げた部分をしっかり見据えた方がいいのかなというふうに思いましたので、ご質問させていただきました。以上です。</p> <p>清永会長</p> <p>はい。ありがとうございました。2点ご質問をいただきました。ひとつはそれぞれの企画に関してでございます。その予算規模も含めた上で、成果を見せる上でも収入の明記が必要ではないかということでした。そしてもうひとつは8ページ目にご</p>
--	--	---

	<p>事務局 (館長)</p>	<p>ございましたウェブサイト等々の運営ということで、これをひとつずつ対比させながら分析していただいて、フィードバック等々が足りないのではないか、その辺からもう積極的な戦略ではないのではないかということをお願いしたいと思います。ただいまのご質問について、いかがでしょうか。</p> <p>はい。お答えします。まず、歳入について、別紙3の令和4年度です。予算及び決算の下のほうの歳入というところに挙げておりますが、こちらがいわゆる収入の部門のまとめです。決算額ですが、こちらのところで展覧会の観覧料につきましては、いわゆる社会教育使用料の枠組みのところに入ってくるのですが、令和4年度については680万5,900円です。その他、使用料ではなく、文化講座の受講料という形、イベントの関係などが入ってくるのですが、雑入というところがちょっと分かりづらくて、そういったところも今後はまとめて、お示しできればと思います。令和5年度につきましては、これから決算の資料を作っていきますが、現状、展覧会に関しましての観覧料の収入、今年度の成績ですが、年を通して観覧料の調定を行なっている収入として確定してものは1,255万1,600円です。2月末までです。3月も3週間分ほどありますが、そちらがどのくらいあるかということにもなりますが、ざっと1,200万～1,300万円の収入が令和5年度にはありました。観覧料がこちらで、そのほか図録、展覧会のカタログの販売を行っておりますが、こちらの年間の年度内に調定したものが、101万4,460円です。展覧会に関するもので、料金を徴収して販売をしているものも合計が1,300万～1,400万ぐらいのところですが、それに対しまして、予算が今年度2,741万5千円。2,700万円余りです。大体半分ぐらい収入が上がっているところかなというのが実情でして、なかなかそこが厳しいところですが。観覧料収入、販売物の関係とかトータルでいわゆるペイする状態ではございません、そこまでということには至っていませんが、この辺りは努力をしていきたいところです。なかなかこれも儲かるものじゃなくて、文化財の取り扱いなどとなりますと、そのまま収入に直結しない部分で非常に大きな経費を要する部分とかある辺りをどうやっていくかということのところですが、例年歳入予算を組む時、こちらの令和5年度予算で決算してないものですが、別紙2の歳入のところをご覧くださいますと、歳入使用料のところ、2,600万円とあげています。展覧会の関係で2,343万円でした。予算要求のところでは、ほぼ平行するようなものをあげつつ、毎年そこには正直至って</p>
--	---------------------	--

		<p>ないという状況です。今のところそこは査定の中で何とか予算をつけていただきながらやっているところです。このようなことで、収入が上げられるものとしては、展覧会ということにはなってしまうのですが、先ほどもご説明の中で申し上げましたのは、調査研究というものは予算がつきづらい、あるいは収集についても本予算がない。これは私どもの美術館だけでなく、公立美術館はおおかた現状そのような予算を維持できていない。ほとんどのところでそんな声を聞きますが、そういう状況で、収入が生み出されないものについてどう理解していただくかを議論し、いろんな市民の方のご理解をいただければという風に思っているところです。そして2点目ですが、広報のところ。確かにいろんな媒体を持っていこうとしますが、正直なところ使いこなせていないという忸怩たるものがございます。この辺り、資料を作っていく、それをまた電子媒体を使いこなしていくようなところに、申し訳ないですがなかなか至らないというのが長年の課題です。また、学芸員が世代交代をしていくという中で、どのような取組ができていくか。あるいは、助力をいただける市民の方でそういったことに長じておられる方をどういう風に引き込んでいくかということで、現在ボランティアの登録とかを受けることはしていませんが、そういった地域の人材など、どんな方がいいかということも探っていくことも必要なのかなという風に思っております。これから学校との連携も、より一層進めていかなければいけないのですが、そういった中で、小学生、中学生の生徒さんが、すごく電子媒体に馴染んでいっていかれている状況の中で、我々文化施設の職員がそういったところについていけないという、なかなか厳しくもあります。こういったあたりも、どういう風に事業化していくか、ということで、予算の中にそういったところが出てきていませんが、将来的にもそういったところを強化するような形を普及教育の枠組みの中に込めて考えていきたいと思っております。そういった中で清永先生もいらっしゃいますが、地域の高等教育機関で、大学などのお力も借りながら、考えていくということでもあります。ぜひそういったお力添えをいただきたいという風に思っているところです。以上です。</p> <p>和田委員</p> <p>はい。今このようにお話をしてもらったのは、協議会の皆さんにも承知しておいてもらいたいという部分があります。実はこれはこうでないから駄目だとか、こうしなきゃいけないとかっていうことではないのです。今の美術館の現状の中において</p>
--	--	--

	<p>清永会長</p>	<p>は、やはり収集でしたりとか、保管でしたり、その他展示、いわゆるその部分がないとできない、維持できないっていうのは正直あると思います。ただ、やはり美術館運営をする上で、世間一般的に市民の方や行政の方も踏まえて、美術館っていうのは芸術文化って結構、触れてはいけない、触れられないのだから中身がよくわからないっていう人が圧倒的に多いです。その中で、こういう努力をしているからこそ、こういうことをしなければいけないっていう意識さえ変われば、多分、後から予算もついてくると思ってます。その中においては先ほど2番目に言った情報発信力は常に持つておかないと、発信すれば「こんなことをやっている。だからこうしなきゃいけない」という考えにたどり着くはずです。今、館長が仰ったように、学芸員の皆さんや美術に長けている方々は、情報発信する手段だったり、その文章だったりっていうところを考えながらできるかっていう、日々の時間にできないですよ。そうなってくると、美術館のファンクラブを作った方がいいとか、もしくは予算をかけてインフルエンスタの方がいいとかっていうところに考えがちです。我々観光もそうなのですが、実はそんな難しいことではなく、もっとシンプルにすればいいのかなと。その発信の仕方というのが、例えば今、高校生も中学生も、もしくは小学生でもタブレットを使って、情報発信もしくはオンライン授業を受けてきております。だからこそ文章を書く力や情報を外に出す力っていうのを、初等教育から受けている部分もあるわけです。それは学校の協力も必要になるかもしれませんが、美術館のファンクラブとして、美術の情報発信を一緒にやりませんかとか、または各地域には協議会というのがあります。自治会のもうひとつ上の協議会というのがあります。そこに美術館の情報発信をしてくれる、いわゆる文書を書く人、もしくは情報発信してくれる人、この場に来て、そういうお手伝いができませんかっていうことも、この協議会の中から提案だったり、もしくはお願いだったりすることによって、またひとつ考えのプラスになるのかなという話のきっかけと思ひまして、今ちょっと厳しいような、重箱の隅をつつくような話をしてしまっただけで申し訳なかったのですが、ただ、継続するためには、皆さんの協力が必要だということを認識していただくために今お話しさせていただきました。ありがとうございました。</p> <p>はい。美術館の現状に鑑みまして、基本的なフレームワークということで、ハードの部分とソフトな部分があります。ハードの方に関してはかなり制約があるということで、そのソフト</p>
--	-------------	--

	伊東委員	<p>の部分に関してそのアクセス数をより高めていく努力が必要ではないかと。その中で、より持続的な発展になるような対応というのがもっと考え得るのではないかというようなご提案であったなと思います。ありがとうございました。他にどなたかご質問ございますか。どうぞ、よろしく申し上げます。</p> <p>昨年1年間、令和5年度の展覧会を見た感想を述べさせていただきます。それとひとつお願いがございます。まず「新・山本二三展」について、ジブリは一般的には非常にイベント性の高い展覧会を行います。グッズやオブジェなどをにぎやかに展示していきます。また実際の展示は印刷物が多かったりするのですが、今回の山本二三展は、ほぼ原画を中心にまさに下関市立美術館が開催するのに相応しい、非常にいい展覧会になったと思います。来館者の方々も、市外、県外の方も非常に多かったと思いますし、年齢層も若い方がたくさんおられましたし、ジブリファンの方とか、新海誠監督さんのファンの方など、非常に幅広い層の方がお見えになったように感じました。下関市立美術館では新しい来客者の層に来ていただきたいということで、目標にして対策をしていたと思うのですが、そうしたところではこの山本二三展の展覧会ではある程度の成果があったと感じました。赤間関硯はまさに下関の地元の工芸品で、「工芸の世界がわからない」「詳しくわからない」という方も大勢いると思うのですが、初めて触れるも非常にわかりやすい良い展覧会だと思います。最後に行われた狩野芳崖の展覧会についても、私個人としても美術教育に携わっているということもあり、日本の近代美術教育の始祖的な方、岡倉天心さん、フェノロサ、橋本雅邦さんといった方々と、美術教育を創始したといったところでも非常に僕にも思い入れがあり、どのように展示するのか興味深く拝見させていただきました。芳崖さんが革新的な新しい表現に挑戦しているような、そうした新しい気づきも非常に勉強になる展覧会でしたし、40周年に素晴らしい展覧会だったと思います。所蔵品展についても昨年は非常に工夫された展示会が多く、関係の皆様が非常に工夫されて準備をして行われた展示会・所蔵品展と感じました。昨年の展覧会は、僕の個人的に見ても素晴らしい展覧会が多かったのですが、40周年で予算も少し余裕もあったと思いますし、成功裏に終わった1年だったと思います。先ほどお話しした山本二三展の来館者の方も、市外・県外から非常に多くのファンもいらっしまったと思いますが、「下関市立美術館は非常に面白い展覧会をやっている」というイメージがつくことによって、そう</p>
--	------	--

	清永会長	<p>思われた方がリピーターとなってきていただける。僕も初めて行く美術館で、そういう工夫しているなというイメージがあると、また行きたいと個人的にも思っていて、昨年は若い子どもさんからご年配の方まで非常にバランスのとれた企画で良い形だと思いました。今後も幅広く新しいファンの方が来ていただけるような企画をぜひとも美術館にお願いしたいとの希望でお話させていただきました。</p> <p>ありがとうございました。ただいまの発言は、令和5年度の展覧会、企画展の3点を振り返っていただいて、それぞれにポジティブな講評をいただきました。とりわけ山本二三展の原画が中心で多くの幅広い客層を惹きつけた非常に成功した例なのではないかということ。これが今後のひとつの基準になっていくと思いますが、それから狩野芳崖展、日本の近代美術教育に大変ゆかりのある人が、もちろん郷土にも大変深い関わりのある方が取り上げられ、かつ新しい眼差しのもとでいろんなアспектを見せていただけた。総括として今年度は非常にバランスのとれた企画となっていたと、こうした形で努力していただけたらというのが内容であったと思いますけれども、これについて、何かご説明、付け加えることがございますか。</p>
	事務局 (館長)	<p>今年度の企画展は3本行っておりますけれども、私が若いころから比較すると、今年度のような予算枠でできることはなかなか、非常に切り詰めてやっていたところでございます。かつては狩野芳崖の展覧会を開催することになると、2,000万円越えの予算を組んだりして行っていました。しかし、今回は半分くらいでどうにか開催しました。ここは企画担当の学芸員の工夫力といえますか、あの手この手でやっていこうということで、その中で面白いと思っただけかかどうかということもあります。今回は助成金を得ることができました。狩野芳崖展だと、自治総合センターのコミュニティー支援の関係のもので宝くじの収益の関係のものでありますが、そちらに採択していただき助成金をいただきました。それから国の機関の所蔵作品の公開促進事業というのがあり、今回東京国立博物館のほぼ門外不出な作品を出していただくことも承諾していただいたり、それに関わる経費の援助をいただいたりしました。そういったこともあり、一般向けのアピールでどのようにするかということも合わせて関係機関に訴えかけ、評価を得られるような企画力、こういったものを両方追求していきました。そういった背景も含めて、この美術館や展開している企画、あるいは普及事</p>

		<p>業というものもチェックしていただければと思います。以上です。</p>
清永会長		<p>その他ご発言等々ありますか。</p>
五十嵐委員		<p>学芸員の方たちが本当にしっかり勉強されていて、二三展、芳崖展どの展覧会も学芸員のご説明がとても感動的で、よく調べていらっしやって、本当に実感いたしました。皆さんもそうかと思います。やはり学芸員さんの日頃の精進というか、研究されているのがこの展示会にしっかり出たのではないかと、本当に感動いたしました。それとこの度が初めてではないかと思うのですが、館外実施講座が市民会館で財団との共催で開かれましたが、これもとても興味深く、展示や演奏会もPRされるという新しい試みはとても素晴らしかったと思います。以上です。</p>
清永会長		<p>ありがとうございました。学芸員の方々の尽力にまずひとつは感動されたということ、それから館外実施講座等々新しい試みに対する評価をいただいたということでございます。これについて何かございますか。</p>
事務局 (館長)		<p>はい。学芸員の体制ということがあります。この美術館は常勤の職員の学芸員が3名で、私も学芸員出身ですので、私も合わせて4人います。さらに非常勤の会計年度任用職員の学芸員は2名です。例えば企画展に限って言うと、3本の企画展で常勤3人と非常勤2人の5人で回していくというのはなかなかだと思います。その他に所蔵品展の企画運営等があり、どのように事業の構成をしていくか、事務量や作業量を考えながら、この働き方改革の時代にどうするのか、やりがいそのものが報酬であるという非常にブラックな方向の業界ではあるのですが、それでは持続できないので、疲弊をどう解消できるかということでもあります。専門職、学芸員という職は、移籍したり、引き抜かれてどこかへ行ったりすることも常にありがちな業界でして、私どもの学芸員も今年度1名大学へ移籍し、いなくなるようになっておりますが、そのようなことでどんどん人が変わっていくことが前提としてある業種です。下関市立美術館は比較的あまり移籍することはなかったのですが、ここ10年ぐらいの範囲で見えていくと、やはり若い世代はどんどん変わっていくと感じます。例えば山口県立美術館もそうですが、30代、40代の方がどんどん異動していき、定着していただくの</p>

	<p>清永会長</p>	<p>が理想ですが、引き留める力が地域にどれくらいあるかということにもなります。どんだん人が入れ替わっていく中でネットワークをどう広げていくかという両面があると思うのですが、そういったところも目配りをしていただければ、先ほどのような形で展覧会事業の評価を高くしていただければ励みになります。そういった中で「ここでやっぺいこう」というエネルギーになっていくと思います。逆にお叱りとして「これはちょっと」ということも含めて、それを駆動力としてやっぺいいかないといけないと思います。もうひとつの件ですが、5年度は下関市文化振興財団さんとコラボレーションするという新しい取り組みを40周年ということもあり試みしました。館外での解説会、それからコンサートと一体になった作品解説ということも行いました。かねてから文化振興財団さんから「美術館とコラボができないか」とのお声掛けをいただいでいて、今回下関市立美術館で文化振興財団の皆さんが例えば演劇や音楽会や学会のような企画もありましたが、それではなく美術館が外に出る形で、市民会館や生涯学習プラザでイベントを開催しました。またこれから先どのように繋げていくかというところですが、文化振興財団さんだけではなく文化協会に加盟されている各団体などとどう連携していくか。これは市内の大学との連携も含め、色々なセッティングで組み合わせる形を考え、今後どうネットワークを広げていくかということで、すごく新しい可能性のあるルートが何か見えるかもしれないと改めて思います。これは文化団体だけではなく、例えば下関市のポートレース企業局とのこともそうだったので、今回いろんな記念グッズの作成をしていただいたり、展覧会の初日に美術館で船の試乗体験会をしていただいたり、展示をしていただいたり、そういったこともあり、一緒にやっぺいこうというポテンシャルを感じ、心強く思ったところでもあります。こういったところも模索して繋げていきたいというふうに思っております。</p> <p>はい。学芸員に関して、やりがい搾取に終わらないような配慮であるとか、工夫、或いは励ましといったことの重要性の一方で、地元で育てていくことの難しさについて語っていただけたと思います。もうひとつは、館外活動のコラボということで多様な活動とのネットワークづくりの可能性についてお話いただけたと思います。他にどなたかまだございますか。なければ、次の議題2 令和6年度の事業計画について、事務局の方から説明をよろしくお願ひいたします。</p>
--	-------------	--

<p>議題 2 令和 6 年度 事業計画に ついて 1 予算</p>	<p>事務局 (館長)</p>	<p>それではご説明いたします。協議会資料 9 ページをご覧ください。まず 1 予算です。別紙 7 をご覧ください。先ほども一部こちらに触れましたが、令和 6 年度の歳出歳入の予算です。令和 5 年度の歳出予算は 1,432 万円ほどでしたが、来年度は少し規模が小さくなります。1 億 2868 万 9 千円が歳出予算。それに対して歳入は 3,832 万 2 千円という構成です。大きな変化としては改修の部分です。改修について、令和 6 年度は空調設備の調査に続き実施設計を行うのですが、これのみになります。こちらの部分で変化がございます。それから美術作品の収集保管の関係で、5 年度はふるさとしものせき応援基金の関係で 650 万円のご支援がありましたが、今回はなくなり、予算の額が変わっています。予算についてはこの表をご覧ください。</p>
<p>2 業務別事業計画 (1) 管理運営業務</p>	<p>事務局 (館長)</p>	<p>業務別事業計画です。まず(1)管理運営業務ですが、まず美術館の経常的管理及び管理運営業務です。次に附属機関の美術館協議会の開催で来年度も協議会を開催いたします。そして 6 年度の新しい業務として観覧料のキャッシュレス決済の導入事業があります。いよいよキャッシュレス化第一歩ということで 6 年度に行います。予算のところにも記載がありますが、先ほどの別紙 7 の「6 年度の当初予算一覧」のところの歳入のをご覧くださいいただきたいのですが、国庫補助金のところにデジタル田園都市国家構想交付金として 60 万円ございます。これにプラスしてその他の美術館の予算を合わせて 120 万円ほどの規模になりますが、キャッシュレス関係の設備の整備をいよいよ行うということが 6 年度の管理運営業務の主要なところ です。</p>
<p>(2) 美術館改修業務</p>	<p>事務局 (館長)</p>	<p>そして (2) 美術館改修業務ですが、空調機の改修の実施設計を行います。</p>
<p>(3) 展覧会開催業務</p>	<p>事務局 (館長)</p>	<p>続きまして展覧会開催業務ですが、こちらにも企画展示、所蔵品展示、9～11 ページにまとめていますが、企画展示を 3 本行い、所蔵品展示は 4 本の開催です。企画展示の概略を申し上げますと、3 本のうち 1 本目「菊舎 旅と友を愛したひと一旅編一」を、今年 6 月 7 日から 7 月 15 日にかけて開催します。これは、下関市立歴史博物館との共同開催の展覧会です。江戸後期の俳人、田上菊舎に纏わる企画展示を 2 館で合同で開催し、会場も二つで行います。歴史博物館の方が会期が 1 週間ほど長くなっており、市の博物館施設の共同企画も今回ございます。次に 2 本目「青池保子展 Contrail 航跡のかがやき」は 8 月 31 日</p>

	<p>から10月14日に開催します。こちらは下関市長府に生まれた少女漫画の巨匠青池保子さんの展覧会です。2023年というのが、青池先生のデビュー60周年で、これにあわせて巡回の展覧会が企画されており、いよいよ郷里下関での展覧会です。300点ほどの原画を秋田書店からお借りして、展覧会を開催予定しています。特別展3本目は「グライズデール・アーツと下関——ライフパーク／人生という芸術の肖像」と題し、来年の今頃となる令和7年2月15日から3月23日まで開催します。グライズデール・アーツと耳なじみのない名前かと思いますが、こちらはイギリスの現代アートの団体で、1960年代に環境問題や環境保護運動と連動してヨーロッパで行われた実験アートから生まれてきた団体で、アートによる様々な社会問題への働きかけに取り組んでいる団体です。19世紀のアーツアンドクラフツという、手仕事の復興を通して社会生活の改善・改革をしようという運動があり、これを引き継いでいるような団体で、この団体は実は下関で2017年からアートプロジェクト展開していたところでした。私どももこの情報をキャッチできていませんでしたが、下関菊川プロジェクトということでグライズデール・アーツが、地域の農村と一体となってアートプロジェクトを行っていたということで、こういったことも紹介しつつ下関発の新しい取り組みをどういう風に紹介できるかという展覧会であります。これに関しては、グライズデール・アーツに所属する写真家の藤田需子(もとこ)さんという方が下関出身であるので、この方に橋渡ししていただき下関でいろいろなプロジェクトが行われているのですが、この人の繋がり、新しい動きを紹介する展覧会です。こちらはこれからの美術館活動がどうなるかということも試されるものだと思っております。特別展は以上で、所蔵品展につきましては協議会資料11ページをご覧ください。4本開催する予定ですが、年度初め4月からの新収蔵作品の紹介。先ほど5年度の収集の活動・事業についてご紹介しましたが、この全てを紹介するものではないですが、新しく収集した主な作品の紹介をるところから始まり、夏の特集、秋にヨーロッパ工芸のエミール・ガレ。2024年は没後120年という節目であるということで、ガレ、そしてガレと繋がりがあった山口県下関市ゆかりの高島北海を中心とした展覧会としています。そしてやはり下関といえばまずこの方という1人である香月泰男さんが没後50年となり、こういったところを組み込み、ご覧のような4本の展覧会を開催をする予定です。そして下関市役所への出張展示も引き続き1ヶ月から2ヶ月ほどの周期で入れ替えを行います。こちらもぜひ本</p>
--	---

		<p>庁にお寄りの際はご覧いただければと思います。その他展覧会ですが、秋には定例の第18回下関市芸術文化祭美術展が10月26日から11月9日とほぼ例年どおりの期間に組んでおります。その他市民ギャラリーで、新しい方も含めての発表があると思いますが、また折々にお尋ねいただければと思います。以上が展覧会の関係のところ です。</p>
(4) 美術作品資料収集保管業務	事務局 (館長)	<p>1枚めくっていただき12ページです。美術作品資料収集保管業務ですが、引き続き収集方針に基づいての収集活動です。ただし、現在収集の予算というのはありませんので、またご寄贈・ご寄託で収集コレクションの拡充ということなると思います。その他所蔵品の活用ということで、所蔵品の館外への貸付ですが、今のところ3件の出品の調整をしています。これは今後各館からも要請が出てくるとは思いますが、今のところ、これらの交渉・調整をしているところです。そして保存収集ですが、今年度のように大きな予算をいただいて屋外彫刻を修理、整備するということができないのですが、引き続き収蔵庫内の整理や作品の状態調査を行いながら、安全な保管を行いつつ、計画を立てて作品の維持継承をしっかりと進めていきたいと考えています。</p>
(5) 調査研究業務	事務局 (館長)	<p>そして(5)調査研究業務ですが、こちらは本当に予算がほぼない状態でご覧いただいたとおりですが、6年度分については研究紀要を刊行する予定です。学芸員の調査研究活動のまとめをしていき、論文発表というかたちになりますが、刊行物、冊子としての刊行を予定しています。令和6年は第18号になり隔年で発行しております。年数が合わないと思われるかもしれませんが、途中発行がない時期もあったためですが、このような予定です。</p>
(6) 普及教育業務	事務局 (館長)	<p>そして(6)普及教育業務ですが、引き続き例年の流れで実技体験等の講座をしっかりと計画して行っていきたいところです。外部の講師の先生をお招きするという方法もありますが、内部の職員による運営でメニューをできるだけ取りそろえて行いたいと考えています。これは話題としてお知りおきしていただきたいのですが、この3月から美術館の彫刻広場の片隅に藍染めの藍を育てる畑を作っています。まだ植えていませんが、こちらを年間通してのひとつのプロジェクトとして参加者を募りながら、藍を育てて藍染めをするという流れのものを市民の</p>

		<p>皆さんと一緒にやっていきたいと考えております。そして資料最後の13ページです。引き続き学校との連携を進めて参りたいと思っています。小中高等学校に関わる場所は、出前授業・出前講座、或いは職場体験、教員の社会体験・研修受入などがあります。それから、これはまさに情報がきてほやほやですが、文化財保護課、考古学博物館側からの提案ですが、博物館で教員の日のようなプロジェクトが県外いろんなところで既に行われています。そういったことを下関市内の博物館施設で連携してできないものかということも考えています。学校の先生方が美術館に来るとするのは、あるようでないところでもありますので、そこをもっと活性化していき、何か取り組みができないかということなのです。いわゆる研修だけではなく、何か新しいことができればと思っています。こちらもまた何らかの研究をして進めて参りたいというところです。次に大学との連携ですが、学芸員の資格を取られる方の博物館実習の受け入れがございませぬ。私どもも美術館事業ではありませんが、市立大学の授業の担当なども学芸スタッフがしているところなので、そういったところでも交流のパイプを太く強くしていきたいというところです。そして広報ですが、資料には電子媒体のみ記載をしていますが、実は今年度で紙の媒体で広報誌を出すのはいったん区切りとし、それからホームページにもっと注力して使いこなしていきたいと考えています。紙の媒体をここ最近ご覧いただいたでしょうか。レイアウトが大混乱している感じを受けておられる方もいらっしゃるかもしれませんが、限られた紙面でいろんな情報を詰め込もうとするあまり、收拾がつかない状況が生まれてしまうので、こういったあたりを含めて、もっと整理し、効果的な形、或いは本当に重要な芯はどこかということがストレートに伝わるような形をもう一度構築し直していきたいと思ひます。そちらは先ほど和田委員さんからご指摘いただいたところで、ぜひチェックを各媒体していただいて、厳しいお叱りも含めてどんどん声を寄せていただければと思っていますので、よろしくお願ひいたします。</p>
(7) その他の事業	事務局 (館長)	<p>そして(7)その他の事業です。外部団体との連携という、これも重複する話になりますが、下関市立美術館友の会との連携、いろんなイベントをやっているところです。色々なイベントの開催であるとか、或いは売店の運営をしていただき、来館者サービスにご協力いただいているところです。これから友の会も会員数の減少や構成されている主要な役員の年齢層が上</p>

		<p>がっている問題など、会の存続に係る難しい問題もありますが、こういったところもどうするか考えるところです。それから地域イベントへの参加協力がございます。観光協会にいろいろお声掛けをいただいているところでありますが、コロナ禍で一度いろんなことが途切れてしまっているのもう一度ここはしっかり整理し、できる形はどんなことかということももう一度考えたいところです。その他の文化芸術関係団体との連携です。これはもう先ほどと重複してしまいましたが、文化振興財団や、或いは文化協会の個別の団体であるとか、そういったところとの繋がり。そのようなところにも意外にいろんな人材の方がいて、実は新しい取り組みをされているにも関わらず、我々も分からずにいたりもするので、コミュニケーションをどんどんしていきたいと考えています。以上です。</p>
<p>質疑</p>	<p>清永会長  山中委員</p>	<p>はい。ありがとうございました。ただいま説明いただいた内容について、どなたかご質問ご意見等ございましたら。よろしいですか。どうぞ。</p> <p>新年度の展覧会もすごく興味深く、個人的にも青池保子展をすごく楽しみだと思っています。個人的なことですが私は南高校出身で、先日同級生で幼馴染が学校で講演をするということで聞きに行きました。その時に私の幼馴染は会社を経営している人として、学校で、高校を卒業してこんな進路をたどって、今こういうことをやっていますという説明だったのですが、もうひとりの講師の先生が三宅律子さんという点描アートをされる方で、ご自身の活動のことを紹介してくださったのですが、南高校出身にこんなアーティストがいるのかと思いました。1秒間に12個点を打つ技で点描のイラストとか、立体造形に点描を打ってアート作品にして活動していました。何が言いたいかというと、美術館の展覧会というのは、先人の顕彰という意味があって、もういらっしやらない過去の人の作品がたくさん見られるというイメージがある方が多いと思うのですが、以前の野村佐紀子さんも南高校の出身なのですが、野村佐紀子さんの展覧会の時は、やっぱり出身の方々がかかり来られたと思いますし、今現在活躍しているアーティストに焦点を当てるといのはやはり新しい層の人に美術館に来てもらうというのにすごく有効だと思います。三宅律子さんはこの度初めて聞いたのですが、あとは書家の万美さんなど下関出身で日本だけでなく世界で活躍しているアーティストさんは探せばいらっしや</p>

		<p>と思うので、そういう下関出身のアーティストに焦点を当てて展覧会をしてみるというのも面白いかと思います。個人的に三宅さんの作品が見たいので、美術館の方にご紹介したら展覧会を開催してくれないかなと思い紹介しました。若い層に来てもらうためには、同じぐらいの年代の人の作品があるとやはり注目が集まったりすると思うので、20代の若い世代で「こんなアートやっています」という評価が追い付いてない人は難しいかもしれませんが、30代、40代、50代ぐらいの現役のアーティストに焦点を当てても面白いと思います。ぜひ探してみてください。以上です。</p> <p>清永会長                      ありがとうございます。ご自身が南高校のご出身であるということで、その講演会の話を取り上げていただきました。公立の美術館というのは既に価値の定まった作家や作品にどうしても焦点が集まってしまいがちですが、もっと若い層にアプローチするなら、やはり地元出身の現役の作家を取り上げてもいいのではというご提案です。これについて、まずは最初に館長の方から説明がございませうか。</p> <p>事務局 (館長)                      ありがとうございます。我々も本当にアンテナが錆びついているので、ぜひ情報提供やご推薦などいただければと思います。作家ご自身が自分のプレゼンテーション、美術館に来るケースもありますが、なかなか皆様奥ゆかしいところもあり、遠慮されている面もあります。そのようなところから美術館で伝統的に扱っているようなジャンルだけでなく、今は本当に多様化しているので、デジタル分野の表現などすごいことをされている方がきつとおられると思います。電子音楽で下関にも非常に著名な方おられますが、こういう場では出てこられず、今のところなかなか一緒という形ではないところもあります。どこまで対応できるかということもありますが、例えば近年ですと、デザイナーの浜井弘治さんが自らやりたいことをプレゼンされたので、もしご関係ある皆様の中にそのような気配がある方がおられましたら、ぜひ背中を押していただく、あるいは美術館に情報をいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいいたします。</p> <p>伊東委員                      質問とお願いです。特別展の方のグライズデール・アーツという現代アートの展覧会についてですが、やはり現代アートは非常に難しさが企画としてあると思います。PRの方法も今までと違うやり方を検討していただけたらと思います。美術館に</p>
--	--	--

		<p>行くとリーフレットがありますが、あるいは大学の教育機関など、特に美大や美術史・芸術学の勉強がある総合大学の方にもリーフレットが置かれていると思います。リーフレット関連をどのような所に送っているのか一点質問としてあります。実際にSNSの時代に入っていますが、美術館に行って「こんな展覧会がある」というのをチラシなどで知ることすごく多く、どういう風に送っているのかお聞きしたいです。また、こういう現代アートの展覧会だと、効果的に大学などの教育機関や全国の現代アート専門の現代美術館のようなところや、海外、アジアや韓国、中国の方も非常に現代アートに興味がある方もたくさんいらっしゃるの、例えば旅行代理店に提供して団体さんが見に来られるようなことが可能かどうか、そういった違ったアプローチを検討していただいた方がこの展覧会に関してはPRの仕方によって大きく動員数が変わるのではないかと思うところがありましたので、提案を含めて質問させていただきます。</p>
	清永会長	<p>ありがとうございます。ただいま広報という観点から2点。まずひとつは質問で、来年度に予定されている3つめの特別展 グライズデール・アーツについて、現代アートということで、とにかく現代アートは近寄りがたいなど、アクセスの難しさがあるとよく言われるが、例えば有益な情報伝達的手段としてリーフレットの配布状況はどうしているのかを知りたい。もう1点は現代アートの広報活動の仕方を少し考えないと成果に繋がらないのではないかということで、今までのやり方に関わらず、例えば旅行代理店などに配布して海外の方にも情報発信をするなど、新しい集客に繋げていってはどうかというご提案でした。これについてよろしくお願ひいたします。</p>
	事務局 (館長)	<p>はい。まず広報印刷物の配布状況ですが、送り先といたしましては、全国の主要な美術館、博物館から始まり、文化施設、文化講座なども含めたホール関係や図書館のような教育機関に関するようところが主になっています。その他というと、学校、大学、高校、中学等にも配布していますが、そういった堅いところが多くなっています。他にも展覧会ごとにその関連のある業種を探し、リストに加えたりするという事はあります。そこももうひとつ考えて、力を入れていかないといけないと思います。これからの観光関係あるいは交通関係のいろんなジャンルも出していくべきですが、広告料が必要になるところは難しい面もあります。あと、特別展については名義共催とい</p>

	<p>清水会長</p> <p>伊東委員</p> <p>清水会長</p>	<p>うかたちで新聞社やテレビ局と一緒に主催に加わっていただいています。グライズデール・アーツについても書いていますとおり、毎日新聞社と tys テレビ山口です。これは各新聞、テレビの事業の一環として位置付けていただいて、関係先にもそういった広報物の配布、紹介をお願いしています。そういったところでそれぞれいろんな関係、関与する団体をネットワークの中で広げていくというところが基本ではありますが、この展覧会については特に今まで美術館ではしていないかたち形の展覧会なので、こういったところに声をかけていくかということと今までは違う広げ方をする必要があります。こちらを改めて、ここはどうかなどご紹介、ご推薦いただけましたら大変ありがたいところでございます。ぜひよろしく願いいたします。</p> <p>どうぞ。</p> <p>山口芸術センターYCAMでもされそうな企画内容かなと思いました。案外、東京の方が旅行も兼ねて、例えばYCAMさんの良い展覧会の際には旅行を入れたり、日帰り限定ではなくて、遠方からお見えになることもあります。これは、ほかに下関市立美術館以外でもされている内容かなと思うのですが、ぜひとも成功裏にこれも終われるように新しい層を取り込めるようにしていただきたいと思います。</p> <p>はい。ありがとうございます。他にどなたか先ほどの事業計画に関して質問はありますか。特にございませんでしたので、本件に関するご承認いただいたということにさせていただきます。</p>
6 その他	<p>清水会長</p> <p>藤井委員</p>	<p>さて、本日本日予定の議題は以上となりますが、そこで最後の6その他となります。委員の皆様方の中で、全体も含めて何かご意見等々ありましたらこの場でよろしく願いいたします。</p> <p>はい。少し視点が違うかもしれませんが、私は美術館の楽しみ方というのは、もちろん素晴らしい展示物、展覧会を見て感動するのも大切なのですが、そのあとに余韻を楽しみたいというのがあります。特に来館者の皆さんは平均するとご年配の方が多いと思います。ただ、ずっと見た後でちょっと休憩したいなど、残念ながらこの喫茶店は使っておりませんが、雰囲気</p>

	事務局 (館長)	<p>を良くしてどなたでも入って「あと休憩して帰ってください」という、そういった余裕があったらいいなと思い、提案させていただいたのですが、現在この場所はどういう形で使われていますか。</p> <p>はい。現在、まさに休憩スペースとして開放しています。給水をしていただくような所ではありますが、飲食となると美術館・博物館という施設は文化財の取扱いに関わる縛りの関係で、飲食物の持ち込みが難しい面がありますので、その辺のご不便をご理解いただきたくお願いしているところです。ただこれに関しては、先ほどのグライズデール・アーツの展覧会もそうですが、生活一般にカバーできるような視点でという企画なので、何かしらの食などにもかかわることができるのか、できないのかというところを探っていきたいです。先日ですが1月に喫茶室を使ってブックカフェを運営していただきました。これは外部団体のご利用ということで、美術館を借りていただくような形で、本を読み、お茶を飲むということを試みました。そういった企画がありましたら、どんどん手を挙げていただいて、ぜひ我々も面白い企画をやりたいと思います。飲食の提供ということで、しっかりした提供をやりたいという事業者の方、もしあればそれはそれでご契約やご使用いただいてということもありますので、そのあたりも逆に我々の投げかけなのですが、もし心当たりの方がいらっしゃいましたらぜひよろしくお願ひいたします。</p>
	藤井委員	<p>いつだったか忘れたのですが、たぶん友の会だったと思うのですが、お抹茶のサービスをいただきまして、すごくいいなと思ったことがあったので、ぜひそういうところを時期時期で構わないので協力お願ひいたします。</p>
	清永会長	<p>はい。美術館におきまして展覧会の観覧後の精神的な昇華の時間と機会についての現状のご報告ということでございまして、他にどなたかご発言ありますでしょうか。よろしくお願ひいたします。</p>
	戸崎委員	<p>先ほどのブックカフェは、私が新聞記事で気づいたのが終了2日前で、おまけに木曜日、金曜日で終わるということですのでごく残念な思いをしたのですがけれども、お抹茶の話は今初めて聞いて、そういうのがあるのは嬉しいなと思いました。意見、助言も何もできませんが、今小学生はタブレット端末みたいなもの</p>

		<p>を持ち歩いて、インタビューにしても、いろんな記録をとるにしても、そこにどンドンしていくような時代で、もう時代遅れみたいですが、私は最初はお子さんたちに物を実際に見てもらったときの感動というのを一番最初に入れてもらえたらいいなという思いがあります。園児を連れて美術館に来ることもどうなのかって言われるとそうなのですが、やはりすごく素直な、勉強のような情報が何もない状態で、その絵をそのまま見せてくれて、一緒に鳥の数を数えて遊んだりとか、「この絵綺麗ねっ」てただ言うだけだったりするのですが、今、映像でいろんな過激な物、子どもをビックリさせるもの、鬼が出てこのアプリを見せたら子どもが言うことを聞くとか、そういうのはいろいろありますが、例えば戦争の情景が描いてあって、悲しいものでも怖いものでも実際お子さんがその絵を見て、今までも怖がったってことはありますが、その絵そのものを見て受けた印象っていうのは、機械を通して見た印象とは、すごく違うと思います。だから情報ばかりというのではないのですが、その子たちが、小学生以上になっていろんな情報が欲しいという時にはウェブとかそういうものが身近にあったら、そこから情報を得て、実際に実物を見たいと思って、来てくれるのはすごくあると思います。先ほど、学芸員さんがいろんな情報を入れて、実際に勉強してくださったというのがあるからこそ、私も小さな子を連れて安心して、こういう方たちが選んでくださった、皆にぜひ紹介したいと言われた絵を一緒に見ようねと、すごく安心してお子さんにも親御さんたちにも紹介できるというのがあります。ありがとうございました。</p>
	清永会長	<p>デジタル化された情報化社会の中での情報との関わり方と、そのオリジナルの作品と出会うことの意味との相関関係、そういったものを広く見据えた上での鑑賞というお話でした。これについて、何か補足する点はございますか。</p>
	事務局 (館長)	<p>はい。戸崎先生にはいつも展覧会に子どもたちを引率くださりありがとうございます。そういう場面に少しくっついて歩いたりしながら、どんなふうにご案内されているのかなというのがいつもすごく勉強になります。子どもや若い人は美術館や博物館というのは、なかなか子どもだけで来ることはまずない風景であります。では誰と一緒に来るかという、誰のところがどんな姿なのかなっていうのを、もっと考えなければならぬと思っています。親子連れで来ているときは親御さんがどのように子どもに語りかけているのかとか、逆に子どもがどういう会</p>

		<p>話しているのかというあたり、こういうものを追跡して記録するのも博物館学という学問の中ではジャンルとしてありまして、例えばこんな話をしている、会話だけではなくて、例えばため息を何回したのかとか、そういったものを全部記録していくジャンルがあるのですが、どういう体験があるのか、それをどう記述、記録して、それをどう取り込んでいくかということがあります。ひとりで来られる美術ファンの方はもちろんですが、そうではなく初めて来る人、或いはあまり馴染みがない方がどういう振る舞いをするのかというのを見るチャンスは非常に貴重だと思っています。そこで子どもさん方を連れてくる大人をどう見ていくか、どう我々がコミュニケーションをしていくのかという、そのあたりのスキルをもう1回作っていく。単に団体見学とかでたくさん来ましたという話ではなく、その中でどういうことが実際起こっているかというのをもう少し丁寧に、例えばこの下関の地区、地域でどのような風土が見えてくるのか、常々関心があるところです。まだ何もできてはいませんが、我々にとっての勉強の場というか、研修の場がまさに戸崎先生のご引率の場面で集約されているところもあります。そういう情報、材料提供という意味もありますので、ぜひいろんな方、いろんな団体やグループに、美術館、博物館という、むしろ縁のない方に来ていただいたら、「何か博物館の人に見られていますよ」というのも含めてご案内いただけたらともっと違う社会的なコミュニケーションができるかなと、そういうチャレンジを呼びかけていただければと思います。</p>
	清永会長	鑑賞という行為は社会的な次元まで含めて幅広くとらえ直していくという動機づけの部分も含めて、これから必要になるであろうというまとめです。他にどなたか。
	事務局 (渡邊主任)	先ほどの戸崎先生のお話の続きですが、今年度、赤間関硯の展覧会を美術館で開催するにあたり、地域の伝統芸能を小学4年生が勉強するのですが、豊浦小学校4年生、名陵小学校の4年生が美術館に来館されて作家と学校の協力を得まして、硯の石磨き体験を延べ200人が体験することができて、とても良い内容の講座で良い経験になりました。10歳、小学4年生の子どもたちが「僕たち展覧会見に来たことあるよ。幼稚園の時に先生と一緒に見に来たよ」と報告してくれた子どもたちがいて、そういったコミュニケーションで、戻ってきてくれた子どもたちを迎えて本当に嬉しかったです。こういったことが今年ありましたのでご報告付け加えます。

	<p>清永会長</p> <p>五十嵐委員</p> <p>清永会長</p>	<p>ありがとうございました。続きまして、はい、どうぞ。</p> <p>先ほどお抹茶の話が出ましたので、きっと芸術文化祭の時だったと思います。私たち文化協会はここをお借りして毎年市民の皆様に、美術、絵画とか、いろんな作品を募集して作品展をさせていただいていますが、いつも本当に美術館の方達が、学芸員の方たちが100%支えてくださりまして毎年できてるわけですが、この市民の芸術祭というのは、やはり美術館に来るきっかけになっていると思いますし、ご家族の方とか身内の方が入賞されると作品を見にいきたいということで足を運んでくださいます。市民の皆様が一番身近な美術展だと思いますので私達もまたいろんな形でご協力をいただきながら、足を運んでいただくきっかけとして力を入れて参りたいと思いますので、今年もよろしく願いいたします。来年度は10月26日、お抹茶の席もありますので、ぜひお越しください。</p> <p>ほかにどなたか。では、これを持ちまして本日の会議を終了します。円滑な進行にご協力いただきましてありがとうございます。では進行を事務局にお返しします。</p>
<p>7 閉会</p>	<p>事務局 (館長)</p>	<p>はい。毎回長くなってしまい誠に申し訳ないです。非常に熱いご提言もいただきまして、美術館活動の指針になる力強い言葉の数々であったと思います。美術館、博物館業界、なかなか厳しい環境から脱せないままずっときているところではありますが、そういった中でも、こういう形で視線をいただいて、力をいただけると、よりそういう機会は増えてくるのではないかと思いますので、ぜひ今後とも、美術館に足を運んでいただき、口も出していただきたいというような形で、ご参加をいただければというふうに思います。また、この会議の内容をまとめましたものを議事録として、下関市のホームページにまとめ次第上げていくようになるかと思いますので、そちらもまたご覧いただきましたらと思います。今回は、新しい委員さんということで、新しい2年間の始まりでございますが、引き続き、ご指導、ご協力のほどよろしくお願いいたします。どうもありがとうございます。</p>